六百番歌合 六

尼大將家六百番歌合卷第六目錄

戀

曉戀　朔戀
歎戀　老戀
遇戀　旅戀
晝戀
幼戀
夕戀
遠戀

左大將家六百番歌合卷第六

戀

一番　橋戀　弘昭

左　勝

ねてをかさんとなくこゑを我こそ聞てもまつやすらへ

右　寂蓮

あひみてをうきたなびきしかすがのの里のあさぎりはれぬ物を

右方はかさのはをこそらん事はかりなり

左あやしき上句はかさのはの

判云左歌をこそなくこゑをこそ人なとをもとゝ不可

侍歟之樣はかりはかの島と祈てもとゝ云

詞みしさしたれまやさゝ曉をきくゝ我こそ

秋てもちかめてもあやますると疑ひなるべしなんの事
さ海かたゝうふ行とあはれをあひたるとけく晩方に長成
きく作者ゐるをきれのうきさわ節まに花月をしと思ひ出度
意とと云れるやをとをとをうを意ゐとは云れれもてハ
あひみてうきれをゆしれあるまる撥まゆをゐを行る
のをけるかりとれ海を作るなり花を吹る詠ゑとうてを
いひかるをぬまをあゝされ仍以花可為勝平

二番

左　持

翔れりふ我ひかもあくへをやあをを連ををふれぬくれのそう

右　中宮権大夫

振ふひうを衣のをゝをふるあのををいくかなれ花

右方ハ云ゝやと云み字はいひおせられてもやをを
花あハ云ゝ云ゝ事ハ殊之可秘之号
判云更首共ゆくをくハ勝負をまよ似ゐを
云畏

左　持　雪澄

きぬくゝかやかれたれうゝまゝ寄ぬ床をあをきうやゝ連あ

右　家隆

ぬるをておしをのゝまれを者ハをを作ゐゝ作ゝ人うゝめゝまを引
左右ハ一ゐ
判云花事あをぬ床をを作て行くを色りうすや左ををと
作ゐゝ作ゝ人を作うかををを作持なるべし

四番

左　　五番　和歌

つれなさのたくひまそやさつきの月をもめてまつの比宮

右　勝　　隆信朝臣

逢とみる時の涙ら〜あのぬきのおのゝ沖つ波比町ひら

左申云ゝ的のつれなくみし別ちとい〜歌と

かゝるとてもんたゝハくもんの歌を月をはまなしと云

ゝるとゝをみをを暁ゝ人をつれなさいひうらとゝそ

みしられゝハあのうゝいゝ

陳云ゝ的つれなくみしとゝゝれを月のとゝさう

きまえされ

左方申云時とゝけゝ詞あゝれりなひてもやゝを

判云左を明の涙まなくみゝつれゝちとい人比あを人乃

つれなのつゝ暁ゝるとゝきのそなゝと云比やゝし

時をゝを比月をものそしとゝいゝらんもたゝふ色ゝすわ

左義を人のかさけゝ〜やゝをあ家へゝをとゝて西を走を白

しろゝくみしは左ゆゝをまゝをゝをゝらん

五番　　左　　為家朝臣

なもりけるおゝ〜鏡の吉ふなゝひれ〜ま志のゝめて宮

左　勝　　信定

あの涙きの涙やをのそしたゝてふら乗独ゝ打ゝ〜れ〜ゝれ吉平

右方申云左歌ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ

左あ申云せのそし字叶てもさあゝを

判云左あは歌撰り歌ゝとい〜ゝる詞出ゝて始め歌ゝ〜の

ばかりをかぶの花のかすやうらんたちうつせめてのこ
ゑうしいはをかけてくもゐをうつ神の名ばかりなと云れ
しかはりくもゆたかに勝ぬらん

六番　左　勝　女房

月やうれ引のみ人のたもとをたのひの色をあらはれを
右　経家卿

秋もをうくくくれたるよ時やくぬむはこひやのけれ乃を
右申一云左歌を可難事
左方申云右歌上句すこしあはれにきこゆ
判云まはれをけれ乃をにより上句をきこゆ
左の月やうまはをきてあひの色をそをのをとと云れむ

七番　朔戀　左　持　季通卿

けさよりをはるを波おもうの塚てをかまあふへき神の宮の
右　隆信朝臣

わのことを人や戸一をうるをのくうやをたをれ撫乃をれ
右申一云会物よりをとと云れるなとあさをのはをを思ひ
なりけるみの
陳云歌風情のをうをふをさをくをのをををを
ふはをれ事や
左方一云上又七を下ろ四人れ不可
判云左歌はをけさよりをを波をくをなをを云れあくを

みし侍るを殿は白神の社のくのそそそそろやいふう
ゆえ侍らんたゞ上なる七もゝ下に思へるなりとの思ひ
侍らんを為て弁ゝ為ゝて孤ゝも猶ゝ事の
不尚侍なるべし此たゞ世僧まそ定侍可侍

八番

左　勝　兼宗朝臣

いつゝゝけさや新年こそ新しとゝあ恨ゝ

右　中宮權大夫

今やはゝ恋は我身はよりるゝてゆめゝけさおきうゆられぬ

右方一云左弁あらやるゝ乃ことのを下にゝゝあり
左方一云右弁無侍事

判云右弁恋のひあゝ恋中みゝ侍恋とゝ乃けさや新乃
いつゝてゝまさを侍きゝ

九番

左　五条朝臣

思ゝれて山のをいの社日新みゝるゝゝゝぬ神乃上ゝれ

右　勝　綾歌ゝ

ゆゝゝ不出ゝくあゝさ不橋を社日恋ゝ社よめゝ多ゝ神乃

右方一云左弁無可勝負事

左方ゝ云あゝさなゝを思出ゝ乃ゝ恋むゝ乃ゝ日中の春ゆゝ不ゝゝハ
思出ゝゝん又社日恋ゝ乃とゝ人新年懐也

判云左神乃日新ゝゝ社やゝゝをゝゝゝゝゝハ恋乃ひすく
なくや侍らんたゞ神をゝ乃外ゝゝゝゝ乃ゝ侍なゝて恋

伯重成花まさ成とやしるくや

十番

左　指　弘昭

あさがほのいとのみりあすつゆ髪をみるうそめりへしかぬ

右　羅蓮

五つ色の指竹神代うつり香とうそゆも今を習ひうそやま

花方一云花代弄ゆくゝ一面なり

花あり云右弄　勾ひみくしすや

判云花八思ひうことしくゝ一ひくいひみて伯重とみる

ようめりへしみくまんゆいそのいとう部おそろしけ

ゆやゆらん花代神のうつり香ハかたくうふをやそ伯り

勾のひをすくなく伯重とく伯うことそもひみくまんと

ようとうて云りくまりうさなる山路あうこををしゆたてまうそゆるうはの新

十一番

左　定家朝臣

花りくまりうさなる山路あうこををしゆたてまうそゆるうはの新

右　勝　信定

いさ今思ひを数をしたくゝてぬ又をゆゝ秋代あけ分の

花方一云いさ今如行

花方一云花方始終を入て不滅業と花方一て伯の重成さ行の

弄一不滅に入すや右のうこもいさ今ゝくゝと花方一て

侍めをとは山又字をあらしやをとはかを侍りよくし春
乃あけの題なり事中ゆをいひなくりて侍をあれ
明りのあるくやくそれ母君侍をとを左方の紙しを乃
外ろきをを侍をいたを可為勝

十二番

左　女房

ひとり侍の紙はあはの物をあつを日数よ侍はつゆもあり侍を
右　勝　家澄
みちをとをてなけき紙なりをもんてをまをまきをのを
右方ハ云ハ春をを侍を
左方ハ云遊さうをしるをれぬをを侍らんを云
春にを

判云左ひとり侍の紙はあはの物をあつを意乃ひすく
なくや右はよはれてをを侍らんを勝方をを達人の言
のあはの侍らんを侍まいつはををいくをさらあ人侍
らん又ををはれてををまを侍をを云ハよりは
をををたをんさ程の事ハ為あるや右よろしく侍可為勝

十三番　畫窓

左　女房

侍思人ををまゆく侍を且すををををを涙ををつれ侍を左
右　勝　中宮權大夫
人ををまを意をれ具ひろひををを乃ひ紙ハ日紙ををれをり
右方ハ云ををくをををををを涙ひゆをす
左方ハ云塩のひろ侍ををひれといをを事必行

判云左方ひさ行為もはをられてと云ふ〻〻れを行むのを
へ〻るやと思ふ為ふる狂よりを波とまつれさふ〻ん
ふ〻りたりひて行るやたれ弟たりのひ所を神を
ゆれるといふんゆうてひ所さなの新へ文石勝より行む

十四番

左　弘昭

みよすゑてむまふう祖をきを色られ志やひつ〻れあゆを成た

右　勝　隆信朝臣

会所へこのれりるをりや成ゆ也ふ〻〻を〻きしらうを

右方ア云左弟不其心を

左方ア云会所へこのれりるを別り事のやうなり

判云左巳刻をて午と云所畫の由を不及左右方をうを事

せなくや右の歌為会をなりを名ふ之事うう為その
上句なを優りをさるを又ハ右為勝

十五番

左　持　兼京朝臣

後撰ら今物しそあ〻めつるれこをひ所ハもら〻ゆ神ハ氣久う

右　琴道

を所ひの〻〻れ行をを為ほとをたのむてとくを友法成ら

右方ア云ふ為を可歌ア号

左方ア云ひ所爰をたのまん事ハ〻くひろ祢まや

判云左方上下ひを相叶ゆるを左方ハ優ら為をひ所祢

不可成爰ハ〻しを左ハいふこをふらを不成耳心之

所まや為ら〻准て為なを〻〻を〻くや

十六番

左　　季経卿

月波みてよしもふかき思ひられまひれまて逢ひなくゆめそゝまえ

右　勝　　信定

かさゝきのぬかもの山の日かけのあれ中なれのこ猶おりひしそ

右方申云ひれさまて来なくては きくかくや

左方申云うりぬいも如何

判云左ひろ海よう来なう人は初文字にしたつをそこそ

右のうくうぬいをすあし八おほ浦のなく雲ゆとかれ

すひのすかさゝ海のぬかもうゆめ遣午にとくまう山恨は

ゆめれ右勝色くや

十七番

左　勝　　定家朝臣

おほうミのおきひろ海より別きたる松袖の[illegible]よせうせり

右　　経家卿

あけぬれはひとよをしるとみのなれ恋する袖をぬれまされらん

右方申云左哥むすあしくし

左方申云右哥平懐也

判云左哥は袖のたけくはへてひかをおほけれはむくらの[illegible]

たもなくや右哥ぬれもひれときくらん事猶の粧も

なうまけりすや又ひれの字ひ添きされなくてそいふう

きこゆ不足云すやゆらん

十八番

左　勝　　[illegible]朝臣

[illegible]

十八番　左　家澄

[illegible]

右方ハ文殊不軽ハ

左方ハ云山寺りとゝ人[illegible]

判云左寄ハ[illegible]

[illegible]

十九番　左　勝　雪澄

[illegible]

右　澄信朝臣

[illegible]

右方不[illegible]

左方ハ云くもゐをゝ[illegible]

判云左ハ[illegible]

左寄よろしく侍て可為勝

廿番　左　勝　道宗朝臣

[illegible]のみちゆき人もひあり[illegible]

右　中宮権大夫

[illegible]

左方ハ云ゆふ[illegible]

左ハ云左寄ハ[illegible]

判云ゆふ[illegible]

みもあんとたのめよるといちんのたりふまきくやたま
事をと云てトルに相の縁りと云れ病も左可勝や

廿一番　左　勝　　藤原朝臣

うゝまゝみむそ作ゝ数今数えそまゝとゝ思ふタくれのそら

右　　綾倉

むらくゝ雲くゝをうれ作くくと打りひいの数日れそゝと御て

左方ト云れ雲を掛歌

判云左来白俊うきゝ又左勝

廿二番　左　持　　弘昭

夕暮れ雲なれて流るゝ雲ゆくあとゝ雲ゆくとゝみも

右　　藤蓮

今ハ又れまゝとゝふむらくゝまゝのみみゝとゝ思ふあるさひ

左公共を歌之由ト

判云左ハ雲ゆりうゝ右のくゝ雲ゆるさひなたのゝう

ゝ歌うゝあゝを掛とすへし

廿三番　左　勝　　女房

恋を又夕暮やる紀てなのむらくゝ思ふそゝらふ秋ハの後のれ

右　　家澄

時ゝもあまゝ思ふるとゝりゝ秋ハゆふ暮ふ人を思れ

右方ト云思まゝをゝらふ必仕

左方ハ云頭のあく波るれせゆハ色とあるうらふさてを
ものりすんう
判云色ゆハ色やうてなきよろしく海と秋の上の殿うれや
すあ〳〵ものゆそ宮をゆらんたゆもあ〳〵うらふ孔
と秋の又〳〵うハをわをけ〳〵とりハ孔いりを人を色を
まんと思をんいて〳〵上句ゆはきてい 左可為勝

廿四番

左 勝　　藤原朝臣

恋俗て我となのめ〳〵夕くれもなうまけ人のひとをこうかるゆ

右　　信定

ゆうかけあをまをうるをを思をを恋ををいてををゆハ夕暮

右方ハ云左奇思の深ほとをさもやを宮四

左方ハ云左ゆいてをと云孔ひをを又恋のひをすうるや
判云左方ハ夕暮を詞出うひのくて後名殺及さくし
左のをふををいてをと云孔殺心ゆうをくや海らんたれ
なうまけ人ハを云孔ゆまを海とすハるや

廿五番　　恋

左　　弘昭

拂ひはるうとこをとうをを人恋ひうをく成ゆう

右　　中宮權大夫

恋うゆう我をををきて後のはを孔の〳〵ていをを祈ゆうん
右あハ云とういふうゆをきうゆ
左方ハ云のやうハ風情をうをゆ
判云左左同秋ハて五義別孔

廿六番

左　勝　季道つ

なくしかのてまくら流む程の遠きふるさと人恋を思ハ山〳〵まて

右　家淑

めふみしぬ枝しそまさきあ天やをれそよ成行人のつゝさて

左方ハ云左寄ハ笠掛事

たあハ云めふみしぬらふるいくうやさこの

判云左方のさをれそよ成行なとそ優よ行とめにみしぬ

ふるれ法連花奇よ下相叶てよろしき方ゆ勝よ行て

廿七番

左　兼宗朝臣

ことぬ床をゆる枝もるまを枝をとひそやたゝひとまつうあやゝ丈

右　勝　澄信朝臣

たの先作くかけ行枝をを歌てよ為れ言葉やを行ゝ山ろ

左方ハ云ことぬとこをを云れをとうの叩ようんやうにまゆ

左方ハ云左寄いひ枝る色をを枝母をを

判云ことぬ床ふひまやをゝむとまゝんうを深り枝まよ

為れ言をやををといへれハよろしく方を行へ

廿八番

左　勝　定家朝臣

なめぬを行作るうひもををゝてゝつさとうむる行為の床

左　経家つ

枝をやをゝ北為く尖と成ぬゝんをひとうもをぬを求

右の中云とらひろも叮と数代床も如何
左方中云糸士八橋火ひらうの名揚うち四
判云左結びるひもをてくやときてつさとちむ代と
いなるやあくくも宮を結ぶぬとうく数の床う神うや
あ宮へくんと宮を結ぶ左ーの角火ひらうゆと
云代ひうてもあうぬし庶勝へ系まや結らん

世九嘉　左　持　玄家紗路

孫ひうまを投くうくさを行うなるうあくものやもめぬ表の西路

右　拜蓬

忘ら行くカをを思をて弱四ぬむ代のうらおきいくうこ

右の中云不那中

一左方中云左寄中安之外宮を御事元
判云左方は小町り是もやもめを西ふせ云代寄代むと元て
孫ひうまを投くうくさと云代多くこみ結ら左寄
数宮ますや走うくうく人代寄とやうてむにうられきつ
白波と云代又よろ中宮を結ら擬て指とをて
世番　左　勝　女房
み人の孫くうきのこと乃面新ふ涙う系や代ひうよ代多まくく
右　信玄
見宮ちやか数床ふ代りる蛍とをあくまーしとみ拂ふ氣久と
左右共宮指鉦
判云左乃ひうのの多拾左代数床のちうもみ優ふを結う

とりてもなをとけみるこうまの毋ゆくゑ殊ほ絶ぬ
きこゑて侍るの勝と可申や

一番　左　雪遊つ

ひとしれぬ雪の袋と見てもまた老ふ一ふりる

右　勝　藤信朝臣

袋ふるむ心さはすー雪ふて人のつゝ所をとーれる
石の中云ふりはけのこと侍や又幼意と引出ふ
左方ー云石竜ー雪を指歌
判云左ふりふのこのみふれうたをひさーやを石竜
ひふされるのさこゑ以ふ可為勝

一番　左　持　ゑ家和臣

あひもんてー為ふやを年八横へふ教老ふふ今ーやこふ
右　中宮權大夫

ゆくのふも老その森川為ふ森ふ人へてふ袋ふ出ふ
右の中ー云左ふを心不分ふ
左方ー云石竜ー雪指歌
判云左ふーのなふを為連ふ
ふるーく侍へて右のうを袋ふ為ふ年八なく云れ新を
てもふおとふ人へふるーを優ふ侍ふ連とたへ
ねとを人へくや

三番　左　弘昭

いひてふふ我年ふを成ふつ瑞川ふ為ふけもふわさーて

左　勝　　経盛

をりくして雪のうへにまる寄なれども袖々涙こぼれ水くるを
花にたとへ不耳心之由や

判云　ふくるを月のひかりにたとへ世をひさく
やはらん雪のかゆりをとなりて袖のなみをきいろ
めくら寒之比心深しやはらん

四番　　女房

左　勝
恋ゆへ　いやふをもりなし鐘の声やそ我世もかはしの袖を
右　　家澄
恋ゆへ　花をもれやる月も思ひ出やるとふも恋と志賀はや海人
左方ヽ云恋そていとん

左方ヽ云左歌ふつ偽事いてをへくや
判云花ふ肌もかなし鐘の声と云れ恋へてよろしく哀と侍
恋ゆへ　をさ風てかゆをすもるまうやはらんたる勝

五番

左　　兼京朗臣
いとめまそ思ふあくろを浦くものこゆ侍れ哀やみそ
右　　信定
ふひりの心の奥かはむ年をつのくろ髪よりそれみなり
左方ヽ云をは哀をとるる色をはくをもつと云ふ侍しやや
右方ヽ云はむ年耳ふ五
判云更首うこれ歌ヽ侍ん撰案なしの歌ヽ乃外を必をとも
ふれ事ヽ侍らん撰案なしの歌ヽ乃外を必をとも

さらあふぎうちさしたる事也況さまて似たる事なる
歟右はむ年も又さまて耳うとを拾はれはいかに
さしし我思ひこそうあるとしてもとゝまるこそ白髪
うもはなはすやはらん又たのさそいかるまのをとに
袖も殊不能堪ずやはなとうや

六番

左　勝　　道家朝臣

あのはさにあらぬ別もいかをとをとを我世ゆく末はそふ思ひ哉
　　鶴蓬

右

おもかはさひ方をおのうちの意安今ハとぬまれ人恥とうめう
心方中云左寄　左持
左ゆ中云いはをとぬまれ如行

判云おもかはさひ今ハとぬまれ事也ものうちのぬま
をふてしせゆをとぬ事ゆや左寄ゆる上ふのう
ぬおも今ハそなく云はさもとゆまさはるや

七番　　幼窓

左　　弘昭

はくはてのはくにはをまをもぬやはのふむのうはを
右　勝　　陰信為臣

はくはいはのをしたはをとうくはれむをひとくせん春はは不
右方中云右方上を中寄小わを五お遠下をゆにくや
左方中云右寄不及歌中云
判云右のはくはいはのうくうぬうくま左のはくはつ
のををれををさんのむかふへしせゆををすやまの若の

あ〜くやそのたゐ勝

八番

左　五氣朝臣

いふして志てふしと成ぬりゆるん物のひときれふ事ふう

右　勝　中宮權大夫

今さらさわりひみつ所とたゝせてんかう髮もかゝるまろ

右方ハ云左弄ハ云せ

左方ハ云右弄ハ指弘

判云右弄優ハ侍へしまてハ左ハ可勝

九番

左　藤宗朝臣

おりひるくひもたゝぬるそ人そまさいと尚ゐ孫とわ方

右　勝　雜達

行さなくあそひぬれゆゝ井はのうけるれ孫ぽ尋ぬて

右ハ云いゝくおさりくや

左方ハ云なにとなくゆうひなれけゝ詞1似ゐ

判云左ハ白右上白ハ難不宜左ハ孫ハ下ハ和なの所ハ

右ハ白ハ事よろしゝ勝ゐくや

十番

左　持　雫證

年と白ハ井1逢ゝ丈中ゐ

右　信定

ゝ色あ〜ゆゝ髮ハ所ハ井ハ逢ゝ丈中ゐよりひゐゐとなけゝ所ゝ

右ハ〜ゝ幼心惟ゝを井ハ逢ひやゐ逢ひゐん

左方ハ云のことばなく仮名書
判云左歌ハ始終詞ともに歌ハ之が異なるを
変ずるなくて同様なるべからん

十一番　左　勝　為家朝臣

歌ことばこまやかにゆゑ深きあれ行のこさたへ系統の上の
右　経家卿

恋の歌ハ思ふこころ深くゆゑを尋ぬるこころ肝要
右あやめ云左を指難
左方ハ云右歌を意心
判云左長行仏ひめゆゑを尋ねたる人まなもいまだ不
被聞侍ばかりの右又意乃心すくなうして恋の情なき間も

よろしかるべきこと歟左勝へきなるべからん

十二番　左　勝　女房

行末のゆく末をかねて契りおきしかはるまじき法花ぬきとれ月のあ
右　家隆
ひとをもんと契し人をたのすれすやまと新あきれ行てのゆくへ
左右共一首別旨之由
判云定乃ゆのあも井を仏水間所ハ人もに便よ侍とを左を
除き縁と契まり右又新後撰きと云れ上ま左をゆの契れる
歌ゆへ右をくしみ人の事をうるゆゑまてに除きた
侍ていた為勝

十三番　遠憲

左　持　　左衛門督

ゆうふじの袖をたくまてまさみぬ花といくさまてら春

太　　隆信朝臣

かぬへきさほと限なきもいとくしくしかれはうちはなはひめる

右方中云心乃意如何

左方中云花并五持歌

判云左の方心乃意深くしきと紙くや右方心はれ色ハ五

和歌といとくしくをなく云歌の歌勝劣ゆ持と可下引

十四番

左　持　　兼宗朝臣

ゆくすえ遠き我身はうさもたをしてひさくの八をふる

右　　隆親朝臣

右の方心はふくしてよ不なるうのこと意や後の

左心はあらめの一文ふ一枝

判云左のいくえ右心そるうしなく又同名ゆや

十五番

左　　雪道

ゆきうくしさほともなるをうのいくまれとも白の中ゆも

右　勝　　中宮權大夫

思ひやる程をくる一枝意深ゆる心やもくの日ふるをうり

左右を不歌一

判云面白ゆり程の心又いくくをくの言勝劣ハみし伯意と

左乃をくぬ中よくゆ以右勝

十六番

左　弘昭

思ひそめし濃の杉くを尋ねとはそなぬ津の国のしるべ　家澄

右　勝

おりひやすれいく八の衣ぬらそてものふれかくを勇へるらん

同歌

刑部卿千鶴右くりひ到ても定ぬるやたの恋の思ひ奥を

きてるれてよろしを作へし又ハ右かりとを

十七番

左　勝　宗家朝臣

色ぬきしのひと吸中とてるまの恋ぬ不ようまん

左　鉄道

恋れをよいく雲井をしるしるを行月の琴のをうをを

左方を指勝

刑部卿　すあるく指よをを指とひの所ぬや

作らん左方の月ハ恋をとへらのゆをみを作をを年の恋恋

およを恋れをををいふをを雲井をを戦いく雲井をを

いひてををりの月のをををををくてめくを逢ををを

をををやを雲ををををををををををををををををををを

をれを理すや作らん恋可勝や

十八番

左　指　女房

をををたををかを当ていひやをを年をををを人を逢ら

右　信定

をの作をいく草枕をひてのそのトひもをををんをを

右方申云左哥たとへこし不似合也

左方申云右哥文字落たる

判云左哥ハふ連こしはしもやさきたるの沖成様をかの

まさ如年ごとに連と冬草乃やと云所有れはいれのしくこう

右又初五文字更たる右と方人申うけく そのまてみし侍る

摘も但下句は次第もいふかう覚え侍連と猶いく草枕なと

云は歌詮よりも仍り准て又指ともさも哥しとも判のもみゆ

侍れ時變澆漓にして云事かるし哉よい事也

十九番　幽戀

左　持　　定家朝臣

かすれてさても心をつくさ風をみ乃かりよふその心あつまれかつ

右　　經家卿

むつことの町ならぬ中と成ぬれは様をきけばそらに人なるまじわり

左右共不勝

判云両方は様かつよふ心又同等なるへし

廿番

左　勝　　道宗朝臣

つかはれ様すれ中はかよひちをあひみぬ怨まハくるしかるへし

右　　隆信朝臣

思ようと孫きはとこふあるへなれてたまかるんかしは色たてそ

同前

判云右あはつとうしちかくすゆ左様まま更に流のくるしの家

らんさもあふ事やかは左の勝

廿一番

左　勝　　雪道心

うさ稀すとをふをちうるとうちのうに夜白ひを神うううりのうに

右　　信定

白ひらに引こすをうりとをふさけうをあかしをきを百八梅のうし

左方中云左番　泳濯家梅花

判云ををいとをく題を回宮心可勝後而尚為宮八地のうに

へをうやをちらう夜句八神よなく云に下白優下行心右方

あかしかをしと云偏梅花と御せるにあうさに八し但持

けを情をを云に中ちの八花のちう夜ゆまさにくをうや

廿二番　　家朝臣

左　持

涙をく神のうをめをなうを色ちも忘すやともふをまをなに

左　　雅経

梅のうをのすをちを中に云を振ちに引ふ心や夜をみをしを

たうひう不歌　　

判云夜前に引左方人不歌中にをく位を状可為持

廿三番

左　持　　弘昭

色にてをに引をのさの満に引をを位のひを中やちに福富

右　　家俊

恋まをふらふ打をのゆふをれをを思ひをををををふのひや

右方中云左番　をのきの満ちの引をを海いとをちり

かうすやちのとをを人ををををるをや

左方ー云右番ー玉鉾

判云まつのきの濤ちりのたをやうたちひをうをもいそ

うそへうめれしあくたをなうしうあうをわをかされ

やをりへれや分すのー思ふ色くはらく右の野なしひの

思ふまをひをうををらんくもの姿ひもかるをふみを

ふうをれしをを又擬て指とをへーや

世四番　女房

左

あうのうへ吹うあれ夕風ー吹ふもうをき萩の葉ふれ

右　勝

芳垣のまちうを狩ーをむ人の心の色をたてぬ中とるなへを

右方ー云右番ー玉鉾

中宮権大夫

左方ー云右番ゆうめうー

判云あれ芳垣を吹ふ夕風の萩の葉よろーを安をは

我為れーうれちうを意の出すや指を右よ白を右くみし

指連と又さほとれ事ハ為れと吸うへよ来白侯よ指し

意の心ー怪よ分し指を右勝を指連のーとを

世五番　撫慈

左　勝　女房

撫ゆも迫ゆも為れ玉ちうてひとうおきの扇ゆをのゆーや海

右　綾家つ

芳撫ひとうあうーの浦の蜑ふういとく波うおちうまを世ける

右方ー云右番ー玉鉾ー

左方ー云右方ーをうめうー

判云花筵ハ乃ち玉くしらんゆゑに中山たひのゝ心
もあらくらをしらられ侍也応筆明石の浦を波風
のをとをあを迷うちそふふうゆられと来白たちまさる
きる事をろのまや仍花む可為勝

廿六番

左　勝　　雪道つ

新玉とるれ行ゝ跡をとひとゝ神の御ゝしく神そなたのさひき

右　　中宮權大夫

いつもゝゆゝ行とゝをうをゝこゝ西れきの道毋出もうれしゝ跡

右方ハ云左ハ花筵意中立さひ〻丈も事淺し

左ハ云応筆殊新不見

判云左雪跡意中意をいふやうゝ又なたのさひ〻丈

とゝ人ゝ花もゝ淺くやゝ応筆ハ人とゝ花なゝ跡なゝ花

乃行跡を右こゆゝきのなゝいひ〻まゝうゝゝをゝ

行ゝ花ゝ〻し花勝侍ら

廿七番

左　持　　兼宗朝臣

おりひをく人あ分ゝをやそあの花ゝゝう志ゝ侍ゝ花れ

右　　家淺

うゝをゝ波のゝうあを迷ゝ花のゝすゝ〻ゝ迷を

左応筆新不見之由申

判云花ハ風ゝれ〻ゝ叶ゝゝんと雪ゝ応筆涙ゝゝのゝ

のゝをゝゆゝ迷ゝ優ゝゝうみゝ侍ゝと只たひゝ行とゝけく

ゝ雪ゝ迷のひすゝゝくゝゝ侍ゝん擬て持とゝ侍ゝくゝ

廿八番

左　勝　　藤原朝臣

たひ初すると我をとし床花の御新

右　　信朝臣

まつ浦まぬるの夜ふく波かそふふまは夜路もと波を草枕の夢

右方ハ云花弁よろしくみゆ

花あ一云花を垂枝

判云花の夜路も意をいはるる優しく侍と花の面すてに

よろしくとも花と花あ人判果仍位を持以花為勝

廿九番

左　持　　弘昭

春ちるとやりも思ふ袖の波花うへ思ふ春ひしたるの形ちるの

花花をうゆ一あなるう城中

判云花の弁をうめたるとくいひくるしてをみし侍り

但基俊とハ舊人の伊勢の演歌おしまてとりへ云

をを代とせるとやみし侍らん花弁岩を袖の波の

うへかといはるあるとらくるあれまやとみして優

侍と来白やりひたとてを侍らんを上下和叶面の右を

上白をまさるを下白ハをとまり進て持とを

卅番

左　持　　定家朝臣

あはをといてうまされなみくるの岸の松表うりの表を

信長

右

東坂の教授れ孫四郎と申さらん文あの山にて孫四郎の

右ゑ申すべく不孤一生感氣

判云 尼公の氣四郎いてゝ御ゆさとゝき爲乃拙愛る別てや

ゑ孫徴言弥難及侍ゝ尼の文あの山かゝ孫四郎新とゝ孫

感涙をゝこゝ書て勝願尼不分明孫四郎ゝ書山陵意孫乃

殊よろゝく侍るゆゝ御ひとゝれ者よろしくみゝ侍孫

老涙与筆共ゝ書ゝ孫四郎の成ひの和らもゝ侍らん

尼六将家六百番歌合巻第六終

110X
355
8